

津屋崎

発足300年
復活40周年

祇園山笠

いま
むかし

「流」と呼ばれる町の集合体がそれぞれの山笠を昇り、津屋崎の伝統行事がやっつくり水浴びて疾走する姿は、津屋崎の魂そのもの！



明治

明治時代の山笠。当時は数口開かれた場所でも山笠が動いているのが見えたと言われています。

津屋崎祇園山笠は今年で発足300年

「なにかいまでもんがこに米んない」。遡る流を出そうものなら、かつてこんな怒号が飛んだところで、祇園山笠では津屋崎を三つの地区に分けており、農業中心の同流、商業中心の新町流、漁業中心の北流と、当時の産業で区分されてきました。今でもありませんが、山笠期間中は流間を隔ねたことも、関わり合いの美ましさから別名「喧嘩山笠」。その分、津同士の結束は強固で、山笠に於ける流まじり情熱を感じ取ることができます。

津屋崎祇園山笠の歴史を紐解けば、江戸時代、福岡市の櫛田神社から福津市の波折神社に祇園神社のお迎えをし、3本の山笠を奉納したことに始まります。そのため、博多祇園山笠といわれ、しきたりは博多祇園山笠にほぼ同じ。筑前国誌風土記拾遺には博多祇園山笠から470年余りたった1714年から、津屋崎祇園山笠が始まった記



町を駆け回る北流(昭和37年頃)

屋崎人形巧房)の原田誠さんが3つの流れと田原山笠の制作を任されています。追い山1週間前には山笠の飾り付けが終わり、お宮入りした後は各地区で公開されます。

今年度は7月19日(土)が、追い山の前日。博多地区へお宮入りする神事。波折折社に集合し、金刀比羅神社と高地神社にも参拝します。また、その前日に各流の代表世話人がくじを引き、追い山お宮出しの順番が決定。そして夕刻、集団山笠見せの後、波折神社に一番山がお宮入りし、その後、追い山お宮出しの順手を上げ、オイヤツの掛け声で同流の流を招き入れの音が響し、張り合いながらも、尊敬し合い健闘します。これが津屋崎祇園山笠に集う男衆の心霊気なのです。



こうして神事の熱気は高まり、最高速の盛り上がりを見せてくれる20日(日)の追い山です。博多祇園山笠はタイムを競ったかが騒いだころ、よく廻るとは山笠を地面に引きずらず、曲が山で止らぬ、といった他の流とは全く違う、といったこと。ほかにも、駒山と追い山が別である博多に対して、津屋崎山笠が同じ山で、博多では山笠を担ぐ6本の棒が角の長いですが、追いが曲が角の多い津屋崎では小回り利かせたために真ん中の2本が番長、外側についていくにつれて短くなる。このように両者の違いを見つけるのも、ひとつの楽しみ方かもしれません。8時10分、水法被に締め込み姿の男衆が、各流の山笠とともに波折神社へお宮入り。境はずに、ただならぬ緊張感が漂っています。そして9時の一番太鼓の合図とともに祝い目出度(一番山)が出陣！続いて一番山三番山が回り留の津屋崎を受け、まだ約2キロを駆け抜けます。約1トンの山笠が勢い水浴びながら狭い路地を疾走する様子は、唯無二の迫力、お祭り神楽、元之屋商店前、しおけ通りなど、山笠が祇園の間隔ですれ違わず駆け引きも見えます。

躍動感に満ちた活気づく津屋崎

山笠にかける情熱と思い入れは昔と同じ

山笠は高いほど神様の利益があると考えられ、資料によれば明から大正にかけては全長が10M以上の大きなものでした。それが大正5年、津屋崎に電線が張られたため、引つかからぬよう半分くらい縮小し、その作り人形や飾りは大きく、山笠の台より外に飛び出したものに変化。昭和に入ると山笠全体に細さが増し、平成には飾りの量も減って安定感のある三角形に落ち着きました。その山笠の飾り付けを任されたのが津屋崎の人形師たちです。下絵を描き、それを各流の当番人に提案します。以前は流ごとに担当人形師がいましたが、現在では、筑前津

平成

勢い水を全身に受けながら勢いを駆け抜ける男衆。その気取道る姿は観客各層の興奮のスタートです。



津屋崎祇園山笠日程

開演 開演千軒なごみ 西 09:40-52-2122

- 特別展示 津屋崎観光協会「あづくる」 7/1(火)~21(月)「なごみ」夕陽館「夏の歌」 7/3(木)~21(月) 子ども山笠や福岡山笠など、これまでの津屋崎祇園山笠にまつわる「伝承」展示が行われる。
- 飾り山笠展示 7/13(日)~20(日) 飾り付けが終わった山笠は各流の当番元に展示され、毎日世話人が常駐して管理する。
- 裸参り 7/19(土) 夕方、山笠に参加する男衆と子どもたちが締め込み姿で裸参りを行い、安全祈願のために津屋崎の3神社に参拝する。
- 追い山 7/20(日) 朝8時、一番山が祝い目出度の歌を1つと同時に、波折神社をスタートする。

早く後らも山笠を昇る。たいな

